

## 内と外の辯證法的雙關對立

寺尾 勇

時間は内官の形式即ち直觀の内面的根本原理換言すればその直接的條件であり、このことによつて間接に外的現象の條件である。故に空間についての討究は空間を以つて始まらず却つて時間を以つて始まる。外官が擧げられると同間に内官がつけ加へられ空間は時間を必要とする。併しその逆も亦真である。「内官の對象の實在性は直接意識にとつて明瞭である。」この明瞭性こそ、觀念論の駁論としてカントが排斥した當のものである。内官は外官に支持されねばならぬ。時間は空間を必要とする。空間と時間はかく相纏綿しつゝも、尙二個の知源であり、このことにより兩者は具體的統一を得る。この時空の二元性に於ける空間に對する時間の優位性は感性論より分析論(特に圖式論)への移程とともに明瞭化される。即ち直觀の純粹形式への範疇の適用を可能ならしめる「第三者」として時間は圖式となる。純粹持

續の名によつてベルグソンが呼んだ如き一度あつて二度ない時間はその特質であるが、論理はあるものゝ普遍的關係の表現である。非合理的なるものを合理化し、特殊の個性的なるものを一度は普遍的全體的なるものに没落せしめることに於て、却つて再び高揚し、浮揚せしめる螺旋的展開のうちに論理の生體(體驗)に對する雙關的あり方が存する。換言すれば「不斷の流轉」動ける成としての現實が、一度自己の生けるものを捨て、動より靜へ、成より定有へと脱落の途を通して——而して脱落の非合理性により、論理の世界は現實存在を母胎的地盤となし、これに即し、即することによつて現實と全く別なる世界へ遊離し浮揚する。生ける具體的存在が没落することによつて却つて成果として己れを残したものが定有的性格を有する論理である。かくて最も深きものを思惟する人は、最も生けるものを愛する。論理の性格を以上の如く解し、生きた時間、そのものから時間の前後の如き本質的關係原理を顯はになし、これを圖式と呼ぶ。直觀は直觀そのものゝ關係が直觀されてゐる、併し直觀は思惟に對して不斷の充實であり、同時に永遠の課題である。故に直觀の内面的關係はそれが論理と結合し、合理化され學的體系と顯はれてから始めてこれを翻つて、知るところが出来たる。直觀の根本は時間の直觀であり、これを圖式によつて論理と媒介した

點に、勝れたる圖式論の意味は存する。併し優位性は固定化され、絶對化されてはならない。二元的對立は動き行く優位性に於て自らを存立する。故に空間が時間の内に嵌入され、時間に優位性を認めたカントの一方的圖式論に反立し、觀念論論駁原則の體系に對する一般的注意等に時あつてか鋭く屢々強調され、準備されつゝある空間の時間に對する優位性、而してこれによる新たな圖式論、即ちカントに於て未だ顯はにされなかつた空間の圖式性は論證されねばならない。

## 二

「カントの圖式論は彼が範疇のみにては、實在化をなすに足りないことを認めた證據である。」この解釋にコーヘンは出發し時間を圖式とし時間を實在性のすべての底とした點にイデアリスムスの意味深い特徴の一つを認めつゝ、純粹性の直觀と思维のカント的區別、從つて論理學に對し感性論の先行に反對し、思维の根源は思维以外にない、純粹思维が己れ自身の内に面し全然己れ自ら純粹認識を産出する思维の論が認識の論であるとの立場から所與性の思想に囚はれ、その故に時間を直觀とせるカントを越え、時間を範疇と解釋してゐる。(故に時間を内官の形式とのみ規定するのは不充分である、範疇の産出的意味は時間に於て具體化し、時間によつて内容が

産出される) かくの如き時間の性格は後顧でなく前望である、繼續ではなく先取である。過去が先づあつて未來が生ずるのではなく、未來が先づあつて過去が生ずる。「未だ」の見地から「最早」が顯現する。故に時間の特質は「未來」であり「豫料の原理」である。併し時間の範疇によつて産出された内容は内部の中身であつて内容そのものではない。内容要素の萌芽の準備ではあるが準備は準備である。それは内的體驗にして、その所産は内を形づくるに過ぎないが、自然の問題は内に對する外の雙關係を要求する。この内に向つて外を對立せしめ外部へ投射することこそ範疇としての空間の課題が存する。後方は先方に對し雙關的に現はれる時間の動搖性、不斷の流轉にある、まとまりをつけ、恒存せる内容を産み出す「共在の原理」は空間の特質である。内より出で内に對立し、かくて外の眞の内容となる故に外へ投げ出すとは内から出てゆくことである、而して内はその矛盾せる外となる。時間から空間への産出作用進行に際し内が外に轉化する、この外は「共在の原理」に於て成立し、こゝに空間と時間の根本的區別が存する。時間は「内」を、空間は「外」を象徴する。かく各々異なる原理により自らを顯はにし、同位的に相對立せる時空の解釋により、その本質的關係は始めて課題的明瞭性を得る。而して關係せしめるとは解くことであり、關係を解く

ことによつて關係づけるのである。運動は時空の關係である。時間は運動を含み得るも、空間の共在はこれを拒む、故に運動は空間の共在が溶解され時間に復歸することに於て生ずる。空間が時間に溶け込むこと、こゝに時空の關係がある。併し空間が消失して時間のみになれば正當には時空關係とは云ひ得ない、空間は溶けつゝ、してなくなり時間の内に没入するのでなく、却つて空間から主として形づくられてゐる背景が働き始める。その背景は固定形象になるのではなく、むしろ投射域、換言すれば方法的運用の「變化の舞臺」となる。溶解作用に於て溶けるものは固定せる空間形象である。空間は時間に消失することによつて却つて自己を「變化の舞臺」として保存する。背景として働く空間に於て、時間に對する空間の優位性は論證され、同時に時空の對立は内と外の問題に原理的に進展する。

## 三

時間と空間の獨立的原理を以上の如くもし考へ得るとするならば、次にこの兩者の綜合的統一は何によつて具體化されるであらうか、而して空間の圖式性は如何にして論證されるか、惟ふにカント圖式論の體系的位置に必然的に由來する第三者としての時間は、相對立するものゝ綜合媒介を果すべき役割を暗示する。云ふ迄もな

く時間に優位を認めた圖式論に基底を有する「單なる現象の形式」としての時間、更に具體化され歴史となることによつて始めて綜合統一の役割を果すであらう。然らばこのことは如何にして可能であらうか。これ等の問題は歴史の動力である「動き行く現在」の性格を究めることにより解き得るであらう。

第一に現在は時間性であるが、同時にそれは時間性にのみとゞまらず空間の一方素である。何となれば不斷の流轉としての時間は、その流轉にあるまじりをつける共在の原理としての空間の滲透によつて過去への没落をまぬがれ現在は現在として自らを固持するからである。かるが故に現在は時空の雙關的滲透である。かゝる現在が歴史の動力である。かくてカントに於て未だ明白でなかつた空間の滲透により時空滲透の圖式論となり歴史の立場へ進め得る。

第二に動き行く現在の背後には、どこまでも止まる現在、即ち永遠があり、歴史的現在の背後にかゝる永遠が働かねばならぬ。永遠が自分自身の内で分裂し、動き行く尖端が現在であり、時は永遠の現在に於て成立する。かくて現在は常に自分自身であると同時に、自分自身でない矛盾を含んでゐる。動を含める靜であり、古きを包める新たなものである。現在は既に達せられてゐる、しかも達することの出来ない

極限である。「時」はかくの如き意味の現在に於て成立するが故に内在的であるが同時にそのことによつて己れを越える超越性を有する、かくの如く辯證法的性格を根本とせる「時」は理性的思惟に盛りきれざる非合理的な意志的なくらさを深底に秘め、それにより實在の達すべからざる深みを指さず。

第三に過去及び未來と現在の關係である。大要に於てベルグソンは過去に、オーガスチンは現在に、コーヘンは未來に各々時の重點を置いた。併しこの三者は時の契機である。過去として定立された時は、その反定立として未來を、更に兩者の綜合的統一として現在があるが、定立より反定立への移程の間に無限に綜合的統一が媒介的要素としてきざまれて内在し、内在しつゝ統一はどこかに超越する。現在は過去と未來を媒介する、そのことによつて兩者を統一してゐる。(併し時の樞軸は現在にのみ固執せられるであらうか。時間の中心をなす統一的媒介者を只一つのものに固定するのは正しくない。關心の選擇の如何により過去又は未來も亦各々時の樞軸である。)この故に制約と必然を擔ひつゝある「過去の維持」維持と云ふ點に空間的面が働きと、新たなる「未來への豫料」豫料と云ふ點に時間的面が働くの交叉的斷面に歴史は成立ち、必然が自由に轉ずる尖端的機が「歴史的現在」である。動ける現在か

ら過去を否定し、それによつて過去を變革し、未來を創造する。かくて歴史は變革と創造を通して實踐と結合する、併し歴史は單なる實踐ではなく反省的觀照の滲透により過去への反省と未來への豫料の綜合である。

## 四

自ら外化せざる内は内ではなく、同時に外化に於て消滅する内も亦内ではない。本來的なる内はそれを一度は外化することに於て再び自分自身に還入する。無限なる内と外との對立による雙關的滲透でなければならぬ。内から出で内に對立し、却つて外となり外は再び内の新しい一種となる爲に、外は外で止まつてゐることは許されず自ら働かなければならない。内は外になるも外は内にもりきれざるものを有し、外は内へ還入するといへども尙内にもりきれざる獨自性を有し、内と外とは無限なる雙關的滲透により對立し、關係する。超越の立場が内を拒み、内在の要求が外を否定するは正しい、但しこの兩者の共通の誤謬は自らの限界を忘れた點に存する。批判哲學は第一に自らの本來的性格によりこの忘れた限界を示した。併し限界は固執され絶對化されるのみではない。確定性と判明性をかち得る爲に、よし一度は限界は固執されたとしても限界は最後のものではない。それは尖端に



驅り上げられ、その反對のものに轉化する。第二に批判哲學は可能者の哲學である。併し可能は常に傾動である。可能なるものは現實に對して動く。可能は現實の稀薄な未熟のものではなく、それは一つの現實であるのみでなく同時に又他の現實であり得る。可能の性格は現實への執着性である。故に内と外を峻別し、これによつて各々獨特の領域を確保することにより、一をもつて他に歸するを得ない二元性を強調するのみにては現實そのもの、全體の構造關聯を根源までさかのぼり詳かにするを得ない、内と外の媒介者を求め、限界は流動し、可能は現實的全體そのものとならんためには批判哲學はヘーゲルの辯證法に席を譲らねばならぬ。

## 五

「内と外とは一つの純粹なる統一性、一つの全き同一性を構成し、一關係の二面ではなく一にして同じ本質である。」ヘーゲルは内と外の關係をかく明瞭に規定した。内と外を窮極に於て相互に對立させることに反對し、たゞ一つの内部的なるもののみあるものは、又それと共にたゞ外部的なるものであり、逆にたゞ外部的なるもののみあるものは又始めはたゞ内部的なるものである。單なる内は反省の犯す誤りであり、それは全く外的な空虚な抽象であると批判哲學の精神に反對してゐる。「自

然は核もなければ殻もない、自然は一度に皮殻であり核心である「このゲーテの言葉はヘーゲルの思想に對し詩的な證を與へた。(この生に卽した自然の立場はヘーゲルにより具體化され内が働き外を統一し意味の本質に徹した。卽ち Ding より Sache への轉化はそれである) 何一つ内側になく何一つ外側になく、何故なら内にあるものは外にある。外であり内であること、卽ち外にあつて包んでゐるものが却つて内に宿つてゐる、その矛盾は辯證法的性格である。「押し進められた規定は卽ち自然にある概念が外へ措定されること、従つてその展開であると共に同時に有が自己に徹し、ゆくこと、有が自己自身に深まることである。」展開とは包藏である。外化は内に徹することであり、内に徹することは卽ち外化することである。かくの如き辯證法的過程により一應は内と外の雙關關係の包括的(全體的)にして根源的従つて徹底的な解決をもたらし得るが如く見える。併し乍らかくて内と外の關係は完結し止揚し、二元は一元となる。内と外の眞なる雙關關係は既にコーヘンの時空の關係に於て内在的二元論として暗示した如く、外が内にとけ込み、内が外に消失し完結しつくされるならばそれは眞なる内と外との關係ではない。雙關關係は内と外との二元的對立を基礎とする。二元性の高調にこそ批判哲學の不朽の正しさを示し得る

も、可能者の哲學より現實の全體を求めんとすれば、所詮ヘーゲルの辯證法によらなければならぬ。併しヘーゲルが歸結した内と外の絶對的同一論は閉ぢられた關係である。辯證法はその方法の必然的本質より完結され閉ぢらるべきではない。對立は無限に内外兩面に開かれなければならぬ。辯證法を批判し合せてカントの二世界論的の批判哲學を生かすことにより内と外の新たな關係へ導く。

## 六

カントの Antinomie にうち勝つことにより己れの内に包み、敵の刃を奪つて却つて己れの盾となし、二律背反が思惟そのもの、本性(思惟は相闘ひつゝ動くことにより己れの根柢なる豫想を克服し判明化する)であると自覺するときに、カントの批判的論理を未だフイヒテに自覺されなかつた辯證法に迄徹底せしめる、己れの敵は實は己れであるとの自覺は存在のあり方であり存在のあり方が辯證法的である。絶對的同一論者ヘーゲルにとつて、カント哲學の最も意味深き發見は、純粹悟性概念の演繹、殊に無意識に創造する自我としても、の自體を原因とし感覺又は印象の興へられた材料から我々に共通な感性世界を作り出す想像力の有機的觀念に存し、その最も反對する點は、實踐理性批判の神に對する實踐的信仰の優位による理論的理性との

(カント自身にて理論的理性の内に統一性と多様性の二元的對立を示してゐる)二元論これである。彼にとつてカント哲學中、興味あるはその同一論に近い立場及びその準備的思想の内にある。即ち「判斷力批判」に發展させた美と生活の觀念であり、實在性と觀念性との同一論である、創造的想像力は直觀的悟性となるが、カントに於て直觀的悟性は人間に不可能な認識として理性の方向から除外され、美的直觀も目的論的直觀も、反省的判斷の必然的ではあるが主觀的なるものとしてカントの二元論の限界を受けてゐる。このヘーゲルにとり、抽象的な二元的對立を動かし、一元的具體性を求めるところに、カントよりヘーゲルへの移程はある。併しながらこのカント二元論よりヘーゲル一元論への移程は充全的に必然であり、且カント的なる限界はヘーゲルの内に最後の極まで解消しつくされるであらうか。この問ひに答へんためヘーゲル辯證法への理解の前に一步退いて質料と形式の對立と關係を中心とせる問題を通路として兩者の比較を試みやう。

中身 *Gehalt* は形式を介して内容となる、故に形式は即ち内容である。形式を離れて内容なく、内容を離れて形式はない。かくてヘーゲルにてはカント的質料に對し何等の餘地を與へ得ない、内容の他に質料はないからである。勿論ヘーゲルは、この

ヘーゲルの結論を得るまでに形式に割りきれないもの、即ち非合理的な質料(これを普通カント的のものから差別して *unrein* と呼ぶ)が残りその質料は常に内容とつながりながら従つて内容は形式で規定しつくされぬ非合理的なものが残り、その段階では形式と内容は一先づ對立されてゐるが、その非合理性は更に展開されたる段階に於て内容の本質的契機となり、最後に即ち最も具體的な段階ではその非合理性も合理化され、形式と内容は全く一つになるとの辯證法的手續を経てゐる。かくてヘーゲルに於ける外から統一するものが、同時に多様の分化の原理である形式の二重性は、合理性と非合理性の結合せる質料の二重性と對應して歸結されるが、それ等の二重性は一元論の地盤に於てあくまでもヘーゲルの特色を含んでゐる。區別を内に含みつゝその區別を本質的契機として同一となるヘーゲルの辯證法的曲藝におどらされたるヘーゲルの綜合はこゝにも貫くからである。この同一論的結論に對し典型的にカントは對立する、即ち内容そのものは従つて質料は形式的原理から導き出すことは不可能であると人間認識の本質的制限を明らかにし、外面的に加はる先驗的統覺の綜合として形成する「形式」、これに對し何等の結合も存せず直接所與としての「質料」の外面的二元的對立を明瞭に説いた。而して形式及び質料の二重

性は彼にとつても宿命的であつた、しかもその二元論的地盤はヘーゲルと隔たること大なる二重性を當然歸結した。多種多様な質料に對して純粹形式を發見するたためにカントは對象に於て主觀がその思惟乃至感覺によつて附加するところのものを悉く擇り棄て、對象に於ける純粹形式即ち延長と形狀を獲た、この對象の客觀的形式、即ち考へられた形式は何等の批判もなく單純に秩序づける主觀的形成原理と同一視せられてゐる。換言すれば客觀的形式が一つの形成作用に代へられてゐる。(例へば延長自身であり得ないで延長を産出する)それがため客觀的形式と客觀的内容との云はゞ靜止せる關係が一變してこの内容を一つの形式によつて加工する又は一つの形式へ入り込むと云ふ動的關係に變つてゐる、しかも形式そのものたるや實に考へられたものであつて構成的なものではない。勿論カントは客觀的形式は對象に於て一切の内容を取去つた後に必然的に殘存すると云ふ事實をば形式と同一視せられた形成原理が認識並びに對象にとり缺くべからざるものであることを證明するに利用した。このことは感覺的對象が純粹形式なしに成立し得ないことを指摘はするが、それは一定の主觀的形成原理に入つて行かねばならぬことを指摘し得たのではない。即ちカントの形式の二重性は二元的に止まり論證せられない。

これと對應して單に與へられたるもの、發展の方法を己れの内に缺くカントの質料にも本來的に別たるべき二重性が含蓄してゐないか。感性論、空間概念の形而上學的究明に於て、感覺を内外及び並存の關係に於て………こゝに明瞭に看取せられるが如く、カントの感覺は單に素材のみで形式がなく、多様性のみで組織の關係がなく、原子論的特色を歸結せるは一面、英國經驗論の他面、啓蒙期の共通的誤謬にして現代の特に心理學の分野より導き出される連續論的又は全體主義的方向により改めらるべき運命を擔へるものである。この意識の並存關係は全體的連關を有し、個々のものは全體によつて制約せられる形態を有する、更に己れが己れを越えて意味を指示する表現的關係に至らねばならぬ。かくある連關的組織を質料に求めることにより形式と質料の關係は次の如く云はれねばならぬ。形式は一つの彼方への關係であり、質料はある、被捕獲性に對する表現を含んでゐる。形式の内にすでに關係が表現を見出してゐる、同時に質料もある種の關係を含み形式と同様に對象的構造内部に於て占むるその位置をすでにその概念中に豫料してゐる。併しながら質料は形相によつて隅なく捕獲され得ない。質料はその形態を有する被捕獲性によつて捕獲されはするがこのことによつてまさしくたい捕獲せられるのみ即ちわくづけ

られるだけで、透徹せられない溝渠を有する。質料の内には捕獲される合理的な形態的質料とも名づくべき部分と、捕獲しきれない非合理的な原始質料又は窮極質料とも名づくべき二重性を有する。構成的形式が形態的質料と結合し論理的接觸をなすことにより明晰性が輝き出されるとするならば、照しきれないものが残されるのは當然である。この原始質料は單なる非合理性を凌ぐ純然たる意義無關與性以外の何ものでもない、即ち理論的に概念し得ざるものゝみならずいかなる見方を以つてするも解釋しきれない暗黒なる剩餘殘滓である、換言するならば本質なきもの、理性的に何事も語らず何事も黙殺する意味及び更に方向すら奪はれたものである。抽象的者より具體的者へと移程するのが現實の本性とすれば、それはいかなる意味であらうか。シェリングがヘーゲルに反對し質料又は物質は外から力を加へるものでなく無限の動きであると考へたのは、生命にも勝りて波立ち湧き返る海原にも比すべき原始的亂動を指示せんとしたのである。一切の規則、秩序形式の根柢にはかくの如き原始的亂動を抱いてゐる。このメチャクチャの方こそ原始的質料であり、それはいかに動くかと云ふのではなく、どこでも、どうにでも動くのである。この亂動は即ち闇の原理に他ならない。この動きが、この原始質料が何等かの意味で否定



されそこに先づ形態的質料を生じ、更にこの否定が否定されて形式となる、併し否定は否定しきれないものを自らの本來的性格により常に殘し行く。個體より社會へ、抽象的者より一般的者への移程は、かくてなされ輝く生命の底には云ひ難き暗黒が秘められてゐる、論理を以つて否生命を以つてすら照しきれざる闇夜はかくの如き意味に於て永久に殘される。ラスクの云へるが如く光は世界を隅なく照明するのではなく、世界の周りが照されるに過ぎない、聖化されるのではなく聖光に包まれるに過ぎないのである。眞理を純然たる明晰性、透徹性、可解性、合理性に解消されつくされるものと考へてはならない。闇とすら云ひ難きこの晦冥、この亂動、波立ち湧き返る海原は、あらゆる形あるものゝ源に不斷にざはめき續けてゐる。かく質料に於ても形式と同様に二重性を、而もこの二重性たるや一を他に歸し難き二元性をもつて歸結される。かくて構成的形式と形態的質料の同一論的結論はよし一度は可能であるとしても、かくの如き形式と質料の背後と行先に原始質料及び純粹形式の存することを指示せる點にまさにあるべきカントの意味は存しなければならぬ。この點にヘーゲルに解消なしつくし得ぬ不朽なるカント的見方が殘される、それにも拘らず所詮ヘーゲルはカントの二元論を越えねばならぬとすればそれは如何なる

點であらうか。

ヘーゲルは好んで「不幸なる意識」について語つた。それは自身の矛盾を知り、二重に分裂した意識である。不變的意識(神的人格)と可變的意識(經驗的偶然的主觀)の間に越え得べからざる深淵を有し、彼岸と此岸の二元的對立である。彼岸は墳墓となる、信神の感情は墳墓を眺め、それを現在にもたらさんとする。本質を把握する限り、たゞ非本質が把握されるのみである。本質は一つの彼岸であり發見せられない。故に意識には生活の墳墓のみがもたらされる。生活の墳墓そのものは一つの現實の故に永久的の所有を許容するは現實の本性に反するが故に墳墓の現存は勝利を失ひ努力の争闘となる。人間の意識がその發展の行程「修業期間」に於て、かく段階を去る時とは全く異つた期待をもつてその段階にふみ入り、見出すものとは全然異なるものを求めてゐるかを、如實に暗示するならばそれは十字軍より大なるものはない。激しい情熱をもつて彼岸をうち眺め、しかも荒涼たる此岸を見出さねばならぬ自欺は「不幸なる意識」のみが經驗する。この意識の非合理性の内に合理的なるものを洞見し、その深淵を光に照し、荆棘の現實の内に理性のバラが咲く、このバラを見て躍り、現實の和らぎを求めものはカントの未熟にして狭量な悟性ではなく、ヘーゲルの

透明なる理性である。イエスの十字架の死により罪の贖ひを成就し、神と人との和らぎを遂げた愛の立場を理性の立場でなさんとする。即ち感情の立場にあるカントの第三批判を理性の立場へ還元し、常に發見せらるべくして、ついに現實に發見せらるゝことなきカントの理念を論理の立場より内在化した。かくてカントの消極的なる矛盾はヘーゲルに於て積極的となつた。こゝにカント的二元論に不朽の意味を認めつゝも尙ヘーゲル辯證法へ移程すべき必然性が存する。自己との抽象的なる同一性は何等の生命性ではなく、肯定的のものが自分自身に於て否定性であり、そのために自己の外に出で自ら變化することが生命性である、故にあるものが自分の内に矛盾を含む限りに於てのみ矛盾を自分の内に把へ且つ持ちこたへたる底の力であるものほど、深き統一性を宿すが故に生命的である。生命とは矛盾である。思惟する理性は鈍く丸められたるものから尖鋭なる對立へと驅り上げられ、こゝに生の潑瀾たる脈動は波うつ。かく矛盾を出發とせる辯證法には分裂と綜合の二面が相交錯する。對立されしかも同一になる、光に照合すれば對立でないものが對立されてゐる。この對立を釋明すれば直ちに對立は對立であることを罷止する。對立の絶えざる措定と止揚同一なるものを對立し對立を結合するそれが眞實の本來

的な理性活動である。釋明とは自覺である。「他」なるものを「自」なるものにするのは Geist の論理である。「自」なるものから「他」なるものを派出する流出の論理ではない。故に眞理はスピノザ的實體でなく、ヘーゲル的主觀である。對立し矛盾するものは平面的に媒介はなく、平面を含める立體的方法により行はれる。矛盾對立を反對對立に化して行くこと、即ち矛盾對立の底に動く地盤としての反對對立を立體的に捉まへ、その地盤である統一的全體的なものを把握することが辯證法である。この低い段階と高い段階との立體的關係を表現するのに非常に抱括的概念として用ひられる Aufheben は、一面消失する契機であり、同時に他面保有する契機の二重關係を意味する。消えてゆくことに於て却つて自分を成果として保存し、沒落することに於て却つて舉揚し、屈することに於て却つて伸びる、その二重の關係は當然第三の意味即ち向上するを指示する。王者は自己を奴隸の奴隸とし、奴隸は自己を王者の王者となす、この象徴的な「主人と下僕」の章は現象論壓卷の部分であり、ヘーゲル辯證法の典型的の作である。現實との和らぎを主題となし、この故にキリスト教の攝理觀とギリシャ悲劇の運命觀との調和綜合を主動因とせるヘーゲルは、その意圖に於て積極的綜合的であつたが、その結果に於ては、それに止まることを得ず消極的否定的理

性に優位を置きつゝも、彼の辯證法の本來的性格より顧るならば、この消極積極即ち分裂綜合は、換言すれば否定肯定は同位的に重んぜられ従つてその何れにも優位を置くのは彼の精神に反し、兩者の綜合統一による同一論こそ窮極的なる立場である。<sup>\*</sup>このことが彼をして一切の抽象性を排さしめ全體的具體的立場へと推進せしめた動力である。この全體の立場より特殊はすべて意味を有し目的論的合理性を得る。全體は絶對者であり神である。神の立場よりすべては生きる、故にヘーゲルの神の論理はカントの批判論理を己れの内に抱擁し、尙あまりなければならぬ。目的論的必然性は法則的必然性と合致する。眞なるものは一つの全體である、全體は發展によつて完成する。然るに歴史は眞理であり、眞理は神である。故に現實的なるものは必然的なるものであり、必然的なるものは現實的なるものである。かくて發展とは發端のみでなく終端にて形成された全體によつて歸結される。原理とは結果である。かく自身を精神と認め發展した精神は學である。直接的のもの最低のものから一步一步昇る絶えざる努力は學であり、眞理は證明され他によつて媒介歸結されたもので、精神の道は媒介である。眞であり理念であるものは、たゞ圓運動をなす推理としてのみ捉へられ、かくてあらゆるものは推理である、紫電の閃めきの如く

天才的迅速をもつて絶對知識より出發するのではない。學は精神の實現であり、精神が自己本有の内に建立した倦まざる努力の王國である。「たましひの國の玉杯から限りなきものゝ香りゆるやかに昇る」この現象論最後の言葉の内に、ヘーゲルの全哲學の含蓄とリズムが詩的に響き渡つてゐる。

\* 經驗的多様とこの多様から全く離れた統一との結合は、何等の内的媒介もなく不可解の謎として殘されるカント的二元論に對して、主觀的理念と客觀的理念、理論的理念と實踐的理念、即ち認識の理念と生命の理念の絶對的統一を基礎とする一元論的立場より戰つたヘーゲルが同時にシェリングの絶對的同一論に向つて別離を告げたことは特に注目し得る。二元論を征服するが故にヘーゲルは即ち汎神論者ではなかつた、神と世界との統一を外見的に兩面の内の一つを犠牲にするスピノザ的無宇宙論は神の内にあらゆる有限物が還没しゆく永遠の夜を見るに過ぎない。かくて區別が除かれないで而も二元論に化石せしめられないことこそまさしくヘーゲルの求めたものである。

## 七

カントからヘーゲルへ而してヘーゲル辯證法の特質を以上の如く理解出來るとすればこれに次ぐものは必然的に批判である。以下ヘーゲル辯證法の批判であり第一と第三は裏合せであり第二は兩者の媒介的位置に存するものである。全體を貫いてヘーゲル辯證法の短所がカントの二世界論によつていかに生かされるかと云ふ課題への討究である。

第一はヘーゲル辯證法の特質である分裂と綜合の批判である。あらゆる解決に

對して拒絶的態度を表明したフイロンの内に古典的にして深遠なる一脈の眞理は否まれない。ヘーゲルの辯證法は反立に對する綜合が確實であり、始めから二律背反はその最後の極みまで解きつくされる運命を保證され、一切の對立が深化する程それに先んじて調和は要請し充實されてゐる。最後の統一を確定的に把握しつつし、それよりすべてを導かんとするは獨乙觀念論の共通的越權であり、ヘーゲルもその誤りを犯してゐる。冒險と飛躍はその半面である連續性と共に現實の本性である。飛躍は然るに二元的對立の上に於てのみ可能である故に二律背反が悉く解決しつくされるのではなく、又解決出來たものは本來的二律背反ではない。解けた矛盾は矛盾の總てではない。矛盾は解ける、しかも解けきれない。本來的矛盾は自分が自分に對立されてゐる即ち自己實現は自己否定であり、自己自身はその最奥に於て狂つてゐる。個體の焦點は解かれざる矛盾である。個體は自立すると同時に、自立しきれない即ち他によつて立つ矛盾を含む。故に個體はあらゆる體系の交叉的斷面に成立する。かくて理性には絶對的透明になりきれないものが殘される、精神は自分の矛盾の襞 *testis* を一度にすつかり展開しつくすことは不可能なるが故に。一切の矛盾が解かれ統一性は靜止し閉塞すべきではなく、硬化した統一は動きゆく

過程として無限に把握せられなければならない。こゝに於てか目的なき合目的性、法則なき法則性(自然の法則が一樣性を捨て個別的のものが自分の位置で全體の上から必然化される合目的論的必然性)を示したカントの目的論は、ヘーゲルの完結せる法則性に對し制限と同時に新たな展開を與へる。閉ぢられた統一性は所詮寂靜主義へ落ちる。世界に於て絶對的目的はすでに完成されてゐると云ふ結論は歴史家として特質づけるヘーゲルの歴史觀にあるものはあるがまゝに任しきる運命への靜觀現象としての生を歸結する。彼が身を任して一切を靜觀的に眺めんとするこの歴史家的態度の故に加ふるに天性コークスの光にも例ふべき性格者なるがため老人とさへ呼ばれた。併しこの冷然たる靜觀は燃えるが如き情熱に、彼の教説に滲透せるかの寂靜の背後には、鋭き生命の力、感激の波が裏づけられてゐた。併し乍ら他面自分が自分を越える進歩は歴史の本質でなければならぬ。自己自身に於て自己を完了する同一論的完結と、自己を越える飛躍的進歩は歴史の兩面である。然るに寂靜主義は進歩を無意味のものとなし往相は還相であり、實在は辯證法的運動をなす概念の自己展開として走馬燈の如く廻轉する。必然と自由を結合し、必然的にして而もあたかも自由の所産なるかの如く、おのづから目的に叶ふものを合目



的性と呼ぶカントの考への内に暗示せるが如く、絶對的的目的は既に達成されてゐると共に又未だ到達すべきもの、充實と同時に課題、欲求と同時に斷念である。既にみただされてゐる、しかも求められてゐるその二元性こそカントを内に徹しヘーゲルに生命づけられた理念の本質である。即ち人間の精神は先驗的自我と云ふ決定的新しさを介して現象の世界を捕捉する、併し絶對的存在者は永遠に認識不可能の彼岸にある。この教説に對して「人間の精神は神の精神を知覺する限り神の精神と一つになる、神そのものは人間の思惟(ロゴス)の内に現存する」との教説を對立せしめかくて二つの世界觀は一つの理念の兩面を示してゐる。

ヘーゲル辯證法への第二の批判は第一の統一性の不閉塞性、矛盾の不可盡悉性に基いて「自」に優位あり「他」に拘束性なき觀念的辯證法の問題である。始と終りが結合し、他を自となすのは自覺的精神であり自覺は直觀のあり方である。ヘーゲル辯證法は「他」を「自」となす點に Idealismus としての特質を有し觀念的辯證法である。併し自覺のみにては盛りきれざるものを實在はその深奥に於て有し、且つ優位性は個定化され得ない。自分が自分を表現するのが現實である。表現とは自分が自分に於て自分を見る作用、その意味に於て自覺である。併し表現されるものと、するものが全

く媒介しつくさるるであらうか。必然性を擔ふ「表現」にもりきれざるものは、媒介なき偶然性を擔へる「象徴」によつて解かれる。統一性が閉塞すべきでないこと云ふことはその半面の對立者を媒介しつくすことが出来ないことを示す。媒介しつくされないものが残されてこそ辯證法は個性の意味を確立しこのことを媒介として、第三の批評へうつる。かくて自覺的者のみにては現實は終らない。自覺の背後は内へ内へと底なく降りゆかねばならぬ。自覺は、自覺しきれないものによつて自らを裏づけるからである。故に「自」に優位あるヘーゲルの觀念的辯證法は、フオイエルバツハの「自」と「他」の同位的人間學的辯證法を媒介としマルクスの「他」に優位ある唯物辯證法へと轉化する。かくの如き一面的辯證法に對して眞なる辯證法はその本質より「自」と「他」の一を以つて他に歸し得ない二元性を必要とする。ヘーゲルの「他」は「自」と一應は對立されながら、このことを本質的契機として「自」と「他」の同一性を結論し、絶對的觀念論に終る。「自」に即しつゝ、尙「自」の外にありて「他」から「自」への拘束力を有する「他」が本來的の「他」である。この拘束力を以つて却つて「自」に働く「他」の故に「自」は「自」によつて自證なしきれぬもの、従つて媒介の行先にあつて、媒介なし得ぬものを確立してこそヘーゲル的な絶對的觀念論を越えることが出来、圓還行程の單なる一契機たる自

然哲學は自らの地盤を得、論理の圖式に墮したる辯證法を百尺竿頭一步を進め世界範疇へと高めることは可能であらう。

ヘーゲル辯證法の第三の批判は第二の對立者を媒介しつくすことの出来ないものを強ひて媒介し、止揚なし得ぬものを強ひて止揚せる「無理」の故に當然生じ來つた第一の裏合せとも云ふべき個性の問題を中心として脱落の非合理性への討究である。惟ふに辯證法が論理の朦朧たるプランコ仕掛であるとの非難を克服し、それは展開的精神のロゴスであり、内在的關聯と必然性を學に導き入れる一切認識作用の靈であり、原理とならんためには、個性の意味が確立されねばならぬ。辯證法は自己粉碎の論理である。即ち先行概念は後續概念に不斷に没入し、各概念は契機として後續概念の内に消失し、自らの自立性を失ひ、對立は立てられ同時にその兩項は滅却され、絶對者は各項が孤立するや否や、直ちにそれを解體する。絶對的一者よりは概念の如何なる區別も存立することなく、棄却され個性を失ふ。併しながらこれを反面より見るならば、類型は死せずしてたゞ個體のみが滅び、個性は個性的である程消滅的であり、その消滅は他のものを以つて代へることの出来ない決定的獨自性を有すべきである。ヘーゲル辯證法にては消失されたものは高揚された段階では、却つ

てそのまゝ保有される絶對的同一性を有する。消失は保有との關係を離れて存し得ないと同時に、その消失は保有をもつて代へきれない個性が存しなければならぬ。消失するしかも消失しきれない全體への裏ぎりの原理である個性の性格によつて單なる顛倒としての脱落に非合理性をもたらしることが出来る。(あらゆる變化は進歩であり凋落すること自身が却つて進歩することであると云ふ同一論のみでは歴史は解けない。進歩をもつて代へきれない凋落こそ歴史に於ける個性を意味づける。故に歴史の流れに於ては一度頂點に達し新生命の開きつくされた時降りゆき、再び頂點を歩むことなく老と死へ至る。没落にはとこしなへに高揚しきれない獨立的個性が、高揚にはとこしなへに没落しきれない限りなき生命が宿らなければならぬ) 同一論のみでは個性の問題は解き難い。生命の流れは一度掘られた河床に常に流れるには堪へ得ず不斷に生の全體を指ざし新しき道を求める。

ヘーゲル辯證法はその統一性、自覺性、個性の三點に於て新たにされ、こゝにカント二元論を生かすことにより、即ちカントとヘーゲルの換言すれば批判主義と辯證法の共に生かされる日にこそ内と外の辯證法的雙關對立を一つの具體的結論へと進め得る方法的通路を確立するであらう。

## 八

以上の方法を通路として、内と外の關係をディールタイの表現、了解、體驗を批判哲學の精神と辯證法的聯關の兩者の立場より討究せんと試み、以下の課題である。

理性は世界を觀察して自己本有の本質をもつ本性に於て再發見する。内は外を通じて知ることが出來、外は内のあり方である。内はそれ自身の内面に、外へと發展する動力を含み、外は内の表現である。外への形態は内に潜在する。内は内の最高の特質をもつ外の形態に表現され、始めて己れ自らを證する。かく内は外によつて證される、自證しきれないものは他證を待たねばならぬからである。内は外への指向性を有し、外は内の成果である。指向とは單に指示でなく常に表現と結びつく。併しながら内が外に展開するのみではなく、従つて外は内の表現のみにては盡きない。外は内のあり方であり、このあり方の故に却つて内を拘束し、内の基底となる。外によつて内が定められ、この定められることによつて内は自らを定める。即ち内から外へこの方向は、外から内への逆方向によつて存立する。この故にディールタイは生の構造關聯を考究して生の内化の方向を「體驗」、外化のそれを「表現」、生の統一的方面である外的なるものから内的なるものへの還歸同時に内的なるものから外的な

るものへの進出を「了解」と呼び、この三契機の相互關係を明らかにすることにより精神科學への道を示した。併しながらヘーゲルに深く影響されつゝも辯證法的展開までに至らなかつたデイルタイの連續なる表現「了解・體驗の三者に批判哲學の二元論的精神に確立された飛躍を取り入れ、且つ辯證法的聯關を原理とするならば内」と外の關係を決する方法となるであらう。而して原理は一義的でなく己れの内に無限の段階と、系列の層をきざみ且つ含蓄する。故にデイルタイの表現は一面より辯證法的性格を通路となし、一度己れと反對の方向にある體驗に没入し、了解に於て自らを新たにすると共に他面この三者の連續的關係が飛躍的關係に裏づけられ、且つこれら三者の平坦なる間隔は溝渠に裏づけられ、没入の非合理性が打立てられ、且つためにカント批判主義を必要とする。表現は己れの内に表現性を含蓄する故に靜的な藝術的表現が表現と了解の兩面が自覺なくして合一したものは藝術の境地であり、全實在が最後の極みまで表現しつくした時それは宗教である、却つて己れと矛盾するものにつきあたり破壊せられ無限に動的となり、表現は己れの内に己れを表現し完成せられない。動きゆく表現は體驗と了解を貫き、了解と表現の雙關係、従つて無限なる媒介者(媒介者は即ち統一者である)體驗が存する。體驗は反省をあり、

方とする故に、表現が了解になる時反省を含む。内より外へ、外より内への二方向に對して、これらを綜合統一する内と外の還歸と進出をなす第三の方向を同一次元を包める立體的次元として相對立せしめる時「動きゆく表現」は内と外の根源的關係を貫く一つの原理として歸結される。對立は必ずしも克服され完結される必要なく、對立はよし和解されなくとも、動きゆく表現は、それ自身に於て克服であり展開である。内は外と矛盾したものととして反立され、その外を了解する爲には單に内よりの方向にのみ止まらず他の生の外化を引用し又は生の全關聯へ歸還せんとする課題が生ずる。即ち内が外化し、自らを規定するのは個體の方向であるが内がそれに對應する外にのみ止まらず却つて他の外の全關聯によつて自らを規定するのは歴史的社會的方向である。了解は、全體の關聯によつて存し全體は個々のものゝ完全なる了解によつて媒介される。併し個體は窮極の深さに於てそれ自身に自立し同時に他によつて立つが故に了解と表現は二元的雙關關係である。

原理は思想の格子であり、それを現實の上に置くのである。併し具體的現實の全體はそれによつて掴まれず常に若干の殘餘が存する。かくて原理は何等の尖端を有せず、上方に向つて再び分散し、最高原理は多元的に終り唯一の最高原理の内に頂

點を持たねばならぬ制約から自由である。原理の統一性の反面である多元性は原理なるが故に一を他に還元なし難き非合理性を有する。併し二元的對立のある關係を求めんためにはレンズの焦點の如く原理の展望台を一先づ求めなければならぬ。その原理から一切を探究すると同時に探究しきれないものを殘し原理自身も動き行く。焦點は一切を焼きつゝ又己れ自らをも灰燼となし、その灰の底より新しき生命の焦點へと動く。故に、原理は多元的であり、相對的である(相對を通じてのみ絶對に至る)。或る原理はその限定された領域ではよし核心的眞理を有するも、その限界を破り全體にまで及んだ時、端役を演ずる。かくて原理は固定化され、絶對化されてはならない。表現了解體驗はかくの如き意味に於て内と外の原理である。

## 九

内と外の二元的對立は、どこまでござんでも無限の層を有し、内と云ふそのことの内にすでにそれに對應する内と外の全關聯が含蓄されてゐる。どこまでも内と外とは二つのものでありこのことによつて具體的統一をなしてゐる。

二元的對立が深まれば深まる程、その根柢に同一のものがなければならぬ。併し對立性と同一性とは二元的にどこまでも存立する。對立は超對立的なるものと



對立する、その二面を包む場所はいかなるものであらうか。對立を包み對立を於てあらしめる「無なる場所」は對立そのものゝ要求である。無の場所の問題は宗教と哲學の關係にかへるであらう。充されてゐる、しかも充されない、包まれてゐる、しかも包みきれない、この暗さは理念の暗さでありそれは輝く暗さでなく、どこまでも煙れる、暗さである。この理念の二元性は、即ち一は窮極の充實とやすらひであり、宗教はこゝを重心として動く、他は無限なる追求の過程とさすらひである。(哲學はこゝを重心として動く、かく理念は未分の統一であり絶對の錯綜である。この理念の二面性を具體化した宗教と哲學の關係を内と外の關係を解いた方法的通路であつた辯證法的雙關對立により明らかにし、この方法の具體的領域に於ける適用を顧み、この小論を閉ぢることにしたい。

## 十

宗教と哲學の對立は、理論的には直觀と論理、實踐的には信仰と理性のすでにこの體系的對立は歴史的なる幾多の經歷を閲したる古きが故に常に又未來に向つて投げかけるであらう處の新しき問題である。カント哲學の劃期的意味は直觀と論理の相互對立及びこれを盲目と空虚の關係で結びつけ直觀は論理に對し充實と同時

に、課題であり、論理のゆく手を示し豊なる内容を與へ、これに反し明晰性と結合性をもたらず論理を説きこれにより先驗的自我が自然界を征服した點にある。先驗的論理學緒言に思惟する能力としての悟性と、感性的直觀の不離なる結合を説きすゝめて後注目すべき次の言葉を記してゐる、これ等二つの性質はいづれをもつて他に勝れりとするには出來ない。理論的立場はかく明瞭に直觀と論理とのいづれにも優位性を立しない、このことはいかにして實踐的立場と結びつくであらうか。ヘーゲルの如く思惟と意志との區別を、理論的態度と實踐的態度との區別に歸し、思惟と意志は二つの能力ではなく意志は思惟の一つの特別の仕方である故に理論的なものは本質的に實踐的なものゝ内に含まれてゐるとの同一論的立場に對し、實踐理性の優位を明瞭に確立したカントの先驗的統覺は、「フィヒテの我」に移程される。直觀と論理の辯證法統一を説くヘーゲルに於ては理論的にも實踐的にも優位性は存し得ない。従つて彼に於ては宗教と哲學は一元的統一をもたらしめてゐる。信仰と理性の對立が問はれるのはカントの二元論的立場に於て始めて意義を有する、併しながら直觀と論理の綜合をカントと雖も無視することは出來なかつた。即ち形式と内容との點では批判主義がコペルニクス的特色を現はし、従つて經驗と先驗的要

素この點では先驗主義が役割を果すの二つが互に獨立の要素であり、一を他から引出すことは出來ない、而もこの二つは何等かの點で結合しなければならぬ、この解決がコペルニクスの態度であり、具體的には先驗的演繹論の圖式論である。形式と内容を結合するのが圖式でありとするならば範疇と經驗が全く別のものであればよし、第三者が媒介しても媒介者と範疇媒介者と經驗の關係を問ひ、手續を複雑にするのみか、又は二者が圖式で完全に媒介されるならばそれは始めから結合せられ得べきものではなかつたかとの立場から圖式論が従つて、第三者が無用であり、又は誤りであると、これをカント哲學から棄却することは正しくない。この淺薄な解釋は一面からはカント的綜合的統一の無理解から生じ、他面からは媒介は全く媒介し盡されなければならぬと云ふ合理論の越權に基づく。カントの第三者はその内に二元性と共に同一性を含む二重性格を有するものではないか。綜合判斷の媒介である第三者はいかなるものであるか。この第三者は思惟作用の方向即ち經驗の可能性の第三者である認識の主觀的方向からは構想力の先驗的綜合所與自身の方向即ち客觀的方向からは圖式である。この圖式論の二重の方向は所詮カント圖式論の窮極のものではないか。「或る家の知覺で私に空間と外的な感覺的直觀一般との必

然的統一が根柢に横へてゐる。しかしこの統一が又或る綜合によつて産出される。カントはこれを構想力の綜合と名づけ、この綜合も統覺の先驗的統一の下に屬しつゝ、他面感性の内に數へられてゐるが「與へられる」と「結合」の區別は餘り嚴格であり構想力は主觀的方面を、圖式は客觀的方面を媒介してゐる。併し對象の實在的可能性はまさしく認識作用の制約と認識の客體の制約とを同一視することにより推論される。即ちカントの圖式論の可能のためには制約の同一性が前提をなし、而も制約の同一性によつて始めて圖式論への歩みが始まる。この壯大な循環論法を通じてカントの二元論は圖式論にまで滲み通つてゐる。この故にカントの圖式論に至つても尙直觀と論理の對立は立てられ優位性は決定されない。が批判哲學の特色が主觀主義構成主義にありとするならば主觀の客觀に對する優位性従つて論理は直觀に對し優位性を有すると考へることも出来る。

直觀と論理の結合をもし歴史的に求めるならば神祕主義その内に於て發見することが出来る。神祕主義とは反省の代りに直接知をもつて絶對を捉まへ絶對について反省的に得たものを結合し一つの體系に組織せるものである。肉の眼を閉ぢ反省的知を閉し自己の心の奥底に絶對者と冥合し内から見るとの神祕主義の本來

的意味はプロチーノス、中世否定神學、エックハルトを経てスピノザの第三種の認識に至り、更に近世シェリング、ベルグソン等に各々異色ある特性をもつて流れた。従つて直觀の論理に對する優位性と云ふよりはこの兩者の統一的冥合により窮極者をくみつくさんとする點に直觀の優位性がある。ヘーゲルに於てはその汎論理主義の根柢に直觀を密かにとりいれつつあるは又否まれない。この神祕主義の實踐に於ける位置づけは信仰と理性の結合を企てつゝ、信仰の優位を特色とする神學に於て發見する。併し神學に於ける信仰の優位性は哲學に於ける理性の優位性と對應するのみにて信仰と理性、従つて宗教と哲學の對立を説明するものではない。

哲學は宗教的直觀のすでに到達せるものを無限にきざんで反省の立場より究明するにあるとせば、果して媒介的反省は絶對者に近づき得るであらうか。媒介は媒介なるが故に最後のものに到達出来ない。併しながら理性は信仰の影を宿し、知は愛の影を宿してゐる。理性の信仰は理性そのものゝ動力である。魂を直指する事、一條の心、直接性は信仰の本質であり、媒介性は理性の本質である。己れが己れに於て媒介しきれないもの、直接性は殘され兩者は辯證法的雙關對立をなす。パスカルはパンセの内に「信仰の事柄に於て理性の拒否程理性と一致するものはない。信仰

の事柄にあらざる事柄にて理性の拒否程、理性と矛盾するものはない、理性を全然認めないのは理性の外何ものも認めないのと共に危険な背理である。」と述べられてゐるが如く信仰と理性の領域は二分されてゐる。併しこの二分されてゐることによつて、理性と信仰は辯證法的關係を性格づけられる。例へば懷疑は信仰と結合すると共に、それに對立する、懷疑は理性の魂であり、反省の動力であると共に信仰の生みの母である。「我疑ふ故に我あり」このデカルト哲學の命題は大陸合理論の出發であり、同時に知ることが出来ない故に信ずるとの中世紀の信條は共にこのことを明示する。懷疑の内にかく含蓄的に信仰と理性は結びついてゐる。又奇蹟は信仰の愛兒であると云はれるが冒險と飛躍は理性の愛兒である。又カントの合目的性は單に知の對象につきずして、知に投射された信仰の影である。この故に宗教的態度も所詮反省の態度から離れる事は出来ない、反省的認識によつて宗教的體驗の新生はあり、それが神學の本質でもある。併し信仰はどこまでも信仰である、認識に窮極の言葉を發するを許さない。焦點はあくまでも知でなく信である、併しこの一つの方向を無限に辿らんとする神の追求者は人生の意義の全體を見渡すことを拒まれてゐる。この生活の不可完成性はまさしく一つの悲劇であり、一面的方向のみでは

それ自身が難破の運命にあり、滅びゆくものゝ偉大ではあるがつひに人生の反面を失ふ。信をもつて代へきる事の出来ない知は人生の他面を示す。かくて焦點とはそれ自ら二つある。自らが自らにいこふのが宗教的特色であり、充實が追求に對し優位を有する。併し信仰にのみもりきれざる所のは残される、而も宗教は己れ自身の本性でなく却つて己れにもりきれざる追求的精神により動くのである。逆に理性は却つて信仰を動力とする。二つの焦點はかくして一は他によつて動くことを示すのである。故に時に、宗教性の核心は安息でなく、追求となり哲學が己れに自足する安息を核心となし切實に「悟り」を求める事はあり得る。この故に、主よ我が心は汝に於ていこふまで安きを得ずとの宗教的態度は永遠に一切の鬭争蹉跌の苦惱よりいこひ得べき終極に思ひをたち、そのかはり未來を得、永遠の救濟は拒まれ、あるひはたゞ永遠に遠き終極を目ざす休みなき努力こそまことの信仰と呼ばれ得ることもある。本來的には恩寵的であるべき信仰が課題としてかく解せられる。その昔、召されたるアブラハムが嗣業として受くべき地に出で往けとの命に従ひ、その往くところを知らずして出でゆいた信仰がそれである。

死することにより却つて生くことが宗教的極致であると人は屢々云ふ。己が

生命を救はんと思ふものはこれを失ひ、我がために己が生命を失ふものはこれを得んとの十字架の教も、我も早生けるに非ず主イエスキリストにありて生くるなりとパウロも教へた。「反對の一致」はあらゆる信仰の論理である。併しながら信仰の生命と動力は己れの内に充しきれざる理性の内にあるが如く、まことの宗教的生命はいかなるものをもつても生に甦らざる死によつて裏づけられなければならない。死することにより生き切れない生命こそ又死に吞まれざる永遠を宿せる生命である。死にもし絶對があれば自殺は一つの解決でもあらう、生にもし絶對があれば現實そのものが解決であらう、併し生きて死するこの二つは人間性の完き實現のため、一を捨て他を取るを得ない。かくて死する事によつて生き、しかも生き切れざる死に裏づけられてこそ生命の尊さを知ることが出来る。かくてキリスト・イエスの宗教が宗教として今日なほ生けるものならば、それはいかなる意味に於てであらうか。十字架の意義は罪なき聖純なるものが罪あるものゝため血汐をもつて、神と人との和らぎを遂げんとするにある。「一粒の麥もし地に落ちて死なずばたゞ一にてあらん、もし死なば多くの實を結ぶべし。」十字架の苦痛の最も深き意義は、新たなる生命を産み救の全うされることに他ならない。併しもし十字架の救が二千年の古カル



バリ山頂に於て全く成就しきつたものとするならば何が故に、二千年の間限りなき  
 殉教の悲劇をくり返したか解するを得ない。未だ十字架の救は未完成なるが故に  
 イエスの宗教は今尙人間の心境の片隅に生けるものではないか。イエスの十字架  
 は神と人との和らぎを求めたとは云へ、尙和らぎきれざるものを残してゐる。我等  
 はサマリヤの里にて「イエス旅路につかれ泉のかたはらに座し給ふ」(ヨハネ四)との疲れ  
 たるイエス、イエス涙を流し給ふ(ヨハネ一・三五)イエス悲しみ迫り(ルカ二・四四)「我が心  
 痛く憂ひて死ぬばかりなり」(マテ四・三四)これ等の内に、地に在りし、日の人間イエスの  
 面影は躍如とする。十字架に近づくイエスの内に彼の神性と人性は益、鋭くされつ  
 るある、父よみ旨ならばこの苦き杯を我より取り給へ、この「聞かれざる祈り」の内にイ  
 エスの最後の姿はエロイ、エロイ、ラマ、サバクタニとの絶叫に連る、こゝにこそペテロ  
 と面接しては聖なる怒りと、燃えたつ非難があり、父なる神と面接しては和解を求む  
 る慈悲があつた人間イエスは未だ神性イエスと對立したまゝ十字架に至つた。十  
 字架に於て人類の罪は救はれてゐる、而も救ひ切れない、神と人は和解されてゐる、而  
 も和解しきれれてゐない、この完成と未完成、融和と對立が死してよみがへる十字架の  
 秘義であり、涸れざる若き創造の本性、心情の偉大でもある。かく十字架の和解は

尙その内に和解しきれざる二元的對立を生命の棘として抱き續けられてゐる。故に未だ救は顯はになりきらず、かくされてゐる、恰もまことの神がそして愛が常にかくされてゐるが如くに。十字架の救は未だ全うされざるが故に、イエスの墳墓は今も尙ゆるがされ動きゆく。「主よ我等いづこに行くべきか永遠の生命の言葉は汝の内に入り」との叫びはかくて體驗することが出来る。人性永遠に神性を憧れて止まない。かくて人生の個々の形體はいづれもそれだけでは斷片的であり、窮極性と成就とがない。生命の泉から滾々と湧き上る、限りなき衝動はいやし難い憧憬となる、この憧憬こそ生命そのものゝ核心であり推進力である。充されざるところのもの、焦點の殘餘こそ、生命の「動き」の棘である。

カントは天才論の研究に於て自然の如く行爲する叡智者として目的論を創作したが、シエリングも亦藝術的天才の意圖なき調和により安らかなる偉大さを説き進めてゐる。内と外、理念と現實の對立は必ずしも克服される必要を認めない。さまざまと、いこひが對立され、そのまゝ調和されてゐる世界こそ、それは荒々しい水のすさびに根ざして七色の虹の常なき世界がよし幻の如く消えゆくとも、しばしとはいへ、こゝに分裂がそのまゝ融和されるが故に、これを叡智的世界像とも呼び得るか

